

吹奏楽現場におけるバスクラリネット指導の問題点

井上幸子

キーワード：バスクラリネット、クラリネット、中低音特殊管、吹奏楽指導、音楽教育、指導者教育

はじめに

中学・高等学校の音楽教育活動の一環である吹奏楽指導において、楽器別の専門家を必要とした時に、指導講師が見つからないということはまずないくらい、日本国内の吹奏楽指導現場における外部講師の供給度は高い。しかし、バスクラリネットという楽器のみ限定して着目した時、途端にこの楽器を指導するための専門知識を持つ指導者が少なくなる。大抵の場合は、クラリネット講師がバスクラリネット指導も兼務していることが多いのだが、中には、かつて少し吹いた経験があるだけとか、バスクラリネットを全く経験したことのないまま現場での指導を求められるケースもあり、困惑したクラリネット指導者からバスクラリネット指導法の事前指導を求められることが少なくない。バスクラリネットのみならず、クラリネット属のとりわけ中低音特殊管（一般的にアルトクラリネット以下を指す）に属す楽器は、同属楽器でありながら、根本的に知識を分けて整理しておかなくてはならないことが幾つかあり、経験の有無に関わらず、知らないままに闇雲に指導をしてしまうと、効果を上げどころか、学習者にその後何年もかけて取り除かなくてはならない間違った癖を植え付けてしまうことがある。ここでは、指導者が中低音特殊管を指導する際の少しの助けとなるように、バスクラリネットの指導例を通して、指導上大切な確認項目を挙げて行きたい。

1. 指導上の確認項目

どのような手順でバスクラリネットを指導して行くことが効果的であるかを、順を追って説明して行きたい。必ずしもこの順番通りでなくてはならないということではないが、問題点を発見して行く過程で、なるべく重要性の高い順に指導していくことが、限られた時間の中で効率良く指導できる結果にも繋がる。ここでは、特に重要な2つの項目について述べてい。

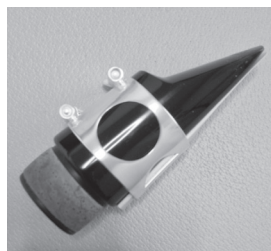
1.1 吹き口（マウスピース）のみを使った奏法の確認

最初に、バスクラリネットの吹き口のみで、確実に音が出せるかどうかを確認する必要がある。これは、学習者が確実にリード（振動して音源になる薄い葦竹）を使って音を出しているかどうかを確認するためである。クラリネットもバスクラリネットも、リードの振動により音が鳴る仕掛けであることは同じなのだが、バスクラリネットの場合、楽器本体まで繋がれる吹き口と金属ネック部分に、思い切り息を吹き込んだだけでも、楽器本体が共鳴を始めてしまうことがあるため、まだきちんとリードを振動させることができなくても、自分が音を出せるようになったと勘違いしてしまうことがある。

しかしこれは、リードを使わずに音を鳴らしているため、相当多くの量の息を流しこむ必要があり、本人は大変苦労して多量の息を流し込み続けているにも関わらず、小さな柔らかな音が鳴るのがやっとで音量はほとんど出てこない。ある程度の音量も求められる楽器であるため、要求に応えようとして、頬を膨らませて懸命に息を入れ続け、やがて口の形も崩れてしまう。

このことは、クラリネットを吹いた経験がなく、最初からバスクラリネットのみを経験している学習者に特に多く見られる傾向にある。指導の際に、学習者がどういう経緯でバスクラリネットを持つに至ったのかを聞いて情報として得ておくことは、指導の際の助けとなる。また、この情報を得ることができない状況にあった場合でも、音を聴いただけでもそのことがわかるようになる。リードを使わずに出している音は、共鳴が開き傾向にあるような、現代奏法の一つの重音奏法（複数の音を同時に発生させる奏法）の一步手前のような独特な響き方のため、大抵の場合は、音を聴いただけでそのことがわかるようになる。指導者は、まずこの音の鳴り方の違いを聴き分け、吹き口部分のみで音が出せるかを確認しなくてはならない。

吹き口部分のみを吹いた時に音を出すことができないケースでは、学習者本人が、長い間、気がつかなかった事実で大変驚くことが多く、本人が動揺するため、リードを使って音を出せていないことを指摘する際には、細心の注意が必要である。大袈裟な記述になるかもしれないが、指導者は本人の前で極端な驚きは一切せず、まず学習者の気持ちを落ち着かせることが必要である。筆者の経験上、八割くらいのバスクラリネット学習者が、吹き口部分のみで音を出せないことが普通であるように感じられる。音が出せないことは珍しいことではないことを伝え、ゆっくりと、根気強く、しかし同時に、限られた指導時間内で確実に音が出せるようになるための導き方を心得て置かなければならない。



バスクラリネットのマウスピース部分。
これだけで音が出せるか確認する。



息だけで音を出している場合は
頬が大きく膨らんでいることが多い。

1.2 指導方法

吹き口のみで音が出なかった場合に、どのようにして音を出せるように導くかであるが、非常にデリケートな導入部分ではあるが、ゆっくりと、しかし確実に、場合によっては少々手荒に感じられるくらい思い切って導かなくてはならないことも事実である。

吹き口のみで音が出ない原因は大きく二つ、下唇がリードの振動に必要な支えを十分に与えていないことと、顎の肉がリードの振動を邪魔していることにある。

一つ目の原因である下唇がリードの振動を支えるために、どのくらいの力が必要かを指導

するためには、指導者が学習者の吹き口の上から少しずつ補助力を加え、どのくらいの力が必要なのかを体感させることが必要になる。最初のうちは指導者側も、どのくらい補助力を加えたらいいかの加減を掴むのがなかなか難しいことではあるが、筆者の経験上、バスクラリネットの場合、吹き口もリードも大きいことと、学習者が吹き口を殆ど支えることなく息のみを流し入れることに長い間慣れてしまっていることが多いため、外からかける補助力の強さは、むしろこちらが思っている以上に強めに押して行かないと鳴らないことが多い。指導者側にも少し勇気がいるところである。

また、指導者は、吹き口のみでどういう音を出させなくてはならないかも把握しておく必要がある。下唇からリードに対して十分な力が与えられていない時にも音が鳴ることがあるが、これは、多量の息がリードを十分に振動させずに鳴る、キーッという、かすめるような高い音である。この導きの際に求めている音は、この音ではないことを覚えておかななくてはならない。しかし、このかすめるような高い音が得られた時には、音が出せるようになるまであと一息の所まで来ているということでもある。指導者は、この音が聴こえた時は、手を緩めず、一気に更なる補助力を加えて音を出させることに導くことが必要である。その際の目標となる音の高さは、実音の「嬰ハ (C#)」である。



ここで二つ目の原因である、顎の肉がリードの振動を邪魔している問題も解決する必要がある。一つ目の原因の解決方法である上から補助力をかけて行く方法だけでも、目標音に近づくことができるのだが、どうしても不安定な響きしか得ることができない。綺麗に響かせるためには、顎の肉の確認が必要である。顎の肉は、下に引っ張るように伸ばし、リードに肉が触れる面積をなるべく少なく薄く、平らになるような形状が理想である。肉が集まって梅干しのような形になっている場合は、平たくさせるように指導することが大切である。

音が出るまで上から補助力をかける



同時に、顎を下へ引き伸ばす



理想の顎の形

以上のような指導を通して、学習者が目標音に近く到達することができるようになる。ここでもう一つ大切なことは、矛盾している説明のようであるが、この音を得るためには、学習者に「自分で音を出そう」と意識させないことが大切である。あくまでもリードを振動させる感覚を覚えてもらうことが重要であるので、「自分で音を出そう」という意識が先に立

つと、ほとんどの学習者は、吹き口を思い切り強く嘯んでしまい、リードの振動どころか、息が入る入り口すら閉じてしまいかねない。大切なのは、顎の形をしっかりと作り、舌をなるべくリードのそばに置き、リードの上から息を乗せるように息を流し続け、リードが振動し始めるのを待つことである。もちろん音を得るためには、ある程度「嘯む」という動作が必要にはなってくるのだが、「嘯んだから音が出た」という記憶のみが先行すると、吹く度に嘯む力だけが強くなっていき、学習者の上達度を妨げることに繋がりがかねない。よく使ってしまうがちの言い方ではあるが、「もっと嘯んで」という表現ではなく、「もっと支えて」などという表現に置き替えて使うことも、指導する側が気をつける点である。

1.3 中低音特殊管を吹く時の意識

バスクラリネットに限らずクラリネット属の中低音以下特殊管楽器のイメージは、管が大きく太く、長くなればなるほど、より大きなエネルギーと息を必要とする楽器と捉えられていることが多い。しかし実際はその逆で、大きな楽器だから大きなエネルギーを必要とするのではなく、「大きな楽器だからこそ、小さなエネルギーが大きな結果に変わる楽器」という意識を持つことが大切である。先に確認した吹き口のみで音を得た感覚を、楽器本体がともなった際にも常に想像して演奏することで、体から無駄な力を取り除き、楽な響きを得ることにつながる。バスクラリネットを吹く場合は、吹き口から金属ネックのあたりを響かせるように想像して音を得ることが大切で、楽器本体全てを鳴らそうと意識しないことで、より豊かな響きを得ることができる。

この意識が重要な理由は、先に挙げた吹き口のみで音が出せない原因の一つにも繋がるからである。クラリネット属には、バスクラリネットよりも、さらに大きな楽器（コントラアルトクラリネット、コントラバスクラリネット）があり、吹奏楽でこれらの楽器を使用する際には、バスクラリネットの生徒が担当することが多く見受けられる。この時に、楽器本体全てを鳴らそうという意識のままに更に大きな楽器を手にしてしまうと、さらに沢山の息を吹き込まなくてはならないと勘違いしてしまうことがある。実際には、息の量は変わらず、息の圧が重要になってくるため、吹き口のみでしっかりと音を得ていることは、クラリネット属のどの楽器を与えられても吹きこなすことができるようになるためにも、大変重要なことである。



バスクラリネットのマウスピースからネック部分

クラリネット属



1. Ab ソプラニーノクラリネット
2. Eb ソプラニーノクラリネット
3. D ソプラニーノクラリネット
4. C ソプラノクラリネット
5. Bb ソプラノクラリネット
6. A ソプラノクラリネット
7. Eb アルトクラリネット
8. F バセットホルン
9. Bb バスクラリネット
10. Eb コントラアルトクラリネット
11. Bb コントラバスクラリネット

(出典：ギイ・ダイガン著 野崎剛史訳「ギイ・ダイガンのクラリネットの本」佼成出版社
写真：野崎剛史氏所蔵)

2.1 フィンガリング（指の運び方）について

次に重要なことは、フィンガリング（指の運び方）である。バスクラリネットとクラリネットのキー（鍵）の構造に大きな違いがあることからもっと重要視されるべきことなのだが、まだその重要性についての浸透率は低い。特に構造が異なるキーは、右手も左手も、人差し指、中指、薬指が担当する部分である。どのように違うかは外見からも一目瞭然ではあるが、クラリネットの場合は、この三本の指で押さえる部分のキーの穴が常に開いているので、学習者は、これらのキーを押さえる時に、自分の指そのものを楽器の一部のように響かせることを意識することが大切になる。

ところが、バスクラリネットの場合は、キーの穴のサイズが大きいので、自分の指で直接その穴全体を塞ぐことは不可能であることから、代わりに金属のキーの上から押さえることで、穴全体が塞がる仕掛けになっている。つまり自身の指が管本体に直接接触れることはなくなるのである。バスクラリネットを吹く時には、この仕組みをよく理解し、キーそのものの動きをよく捉えて、コントロールする感覚が必要である。



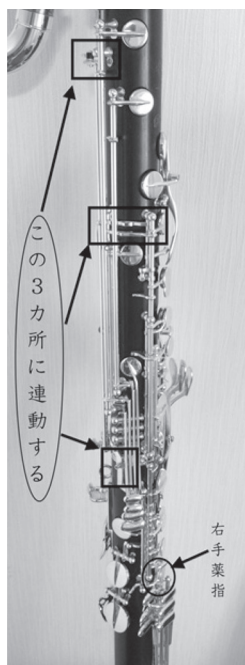
バスクラリネット（左）とクラリネット（右）のキー構造の違い

このことが重要な理由の一つ目は、運指の速度に関係してくることが挙げられる。吹奏楽曲においてのバスクラリネットは、多くの場合は、低音で伴奏を担当していることが多いため、いわゆる旋律楽器と呼ばれる楽器と比べると、細かく速い指の動きを要求されることが少ないイメージだが、曲によっては、旋律楽器と同様な速い指の動きを要求されることもある。独奏コンクールなどの機会を得て、バスクラリネットのために作曲された独奏曲などを演奏したいと思った時には、さらに高度な運指技術が要求される。

二つ目は、楽器を長く良いコンディションで使い続けることができるようになるためである。吹奏楽部が所有する楽器備品の中で、バスクラリネットが修理に出される割合は多い。これは、外部指導時にバスクラリネットの状態の点検をしても感じていることでもあるが、楽器店で修理担当の方にお話を聞いていても、かなりの割合であることが感じられる。これは、バスクラリネットのキーを動かすために、必要以上の力を加え続けていることが原因である。キーは、指で押さえるだけで十分にその機能を発揮できるのであるが、殆どの学習者が上から叩きつけるようにして動かしているのが実状である。これは、クラリネットからバスクラリネットに移行した学習者の場合には、特に大きく見られる傾向にあるが、最初からバスクラリネットを担当している学習者の場合にも見られる問題であるため、バスクラリネットを持った時点で最初から知っておかなくてはならないことの筆頭に強くあげたい。

特に不具合の原因となるキーは、右手の薬指が担当するキーである。古い年代に製造された最低音が変ホ音までの楽器（以降、Low Es 管と呼ぶ）の場合を除いては、このキーは、下管と上管をつなぐジョイントキーに連結しており、さらに上部まで繋がっていき、音域の上下移行を操作するレジスターキー付近の複雑な構造部までつながる要のキーであるため、もっとも繊細に取り扱うことが必要なキーである。しかし、このキーは、使用頻度が高いことに加え、担当する右手薬指には比較的大きな力が入りやすいことで、知らず知らずの上から強い力で何度も叩いてしまっていることが多い。この部分の力加減を改善するだけでも、楽器の不具合が起こる要因の一つを防ぐことに繋がる。また、このキーのみならず、いずれ

のキーも、繊細な構造上に成り立っていることから、学習者は自身の指の運びにもっと注目して楽器を取り扱うようにしなくてはならない。

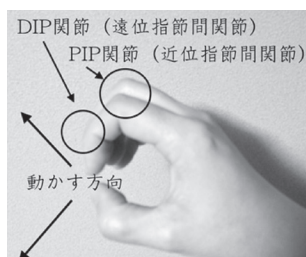


バスクラリネットの薬指部分からつながるところ

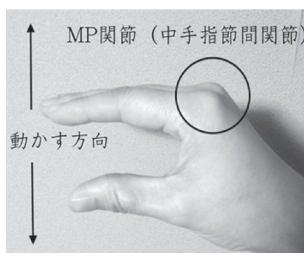
2.2 指導方法

指の運び方に関して、どのように指導改善していくかであるが、まずは指の力を抜くことを徹底して指導しなくてはならない。そのためには、指をどの部分から動かすことが重要であるかを意識させることが大切である。多く見られる例では、指の第一関節（DIP 関節 / 遠位指節間関節）と第二関節（PIP 関節 / 近位指節間関節）に意識の全集中がある例である。指を動かす際に、これらの関節に意識が集まってしまうと、「指そのものを動かそう」という意識が強くなってしまっていて、指先だけを動かすことになり、次第に指だけでなく腕にまで力が入ってしまい、その結果、腱鞘炎を招く事例も見受けられる。

また、指先のみを動かそうと意識すればするほど、運指の速度も遅くなる。指を動かす際には、第三関節（MP 関節 / 中手指節間関節）から、指全体を一緒に動かすように意識することが大事である。小さな意識の改善で大きな結果を得られるため、このことは特に注意して指導していくことが重要である。



(悪い例：指先だけを動かしている)



(良い例：指全体を一緒に動かしている)

前述で、バスクラリネットを吹く時には、キーそのものの動きとスピードをよく捉える感覚が重要であると述べたが、このことは、これらの関節の意識とも密接に関わってくる。まるで、キーとともに指が生きているかのような感覚が理想であるが、これは、第三関節（MP関節 / 中手指節間関節）から指を動かす意識を持った時に初めて実現可能となる。第一関節（DIP関節 / 遠位指節間関節）と第二関節（PIP関節 / 近位指節間関節）に意識が集中したまま指先だけを動かしている状態では、どんなにキーの動きと共に自分の指を動かそうとしても、どうしても指が遠く離れてしまい、キーに指を戻す時には、遠く上から強く叩いてしまうため、楽器や自分の指も痛めてしまう結果になる。



(悪い例：指が個々に独立して、高くあがってしまう)



(良い例：手が常に自然な形を保ちながら動いている)

このことを防ぐためには、とにかく脱力が大切であるため、実際にどのくらい力を抜く必要があるかを体感させることが、有効な指導法である。必要と感じられれば、自然に力は抜けていくのであるが、バスクラリネットの場合、常に遅い動きの曲が与えられることが多いために、学習者がなかなか実感としてその必要性を感じ取ることができないことにも問題がある。

筆者が行っているフィンガリングの練習方法の一つに、自由即興の取り組みがある。これは、楽譜に記載された音の世界から一度離れ、自分であるイメージを頭に置き、それを音で創り上げて表現して行く試みであるが、その際の決まりごととして、動と静の対称的な表現を取り入れることと、動の時には、指を自己限界の最速で動かすことを課題に取り入れている。速く指を動かせるようになるためには、まず速く指を動かすということが、一体どうい

うことであるのかを体感することが必要である。一度、自己の限界に取り組み、最速の世界を経験することができれば、どのくらいの力加減で指を動かしてはならないかを、学習者自身が経験として記憶することができ、練習の際にも、自分自身で第三関節（MP 関節 / 中手指節間関節）からの動きの意識と指の脱力に気をつけられるようになる。

3. 姿勢

代表的な確認項目の三つ目に、姿勢について述べたい。バスクラリネットに限ったことではないが、楽器を演奏する際の良い姿勢を知っておくことは、楽器上達には必要不可欠である。ここでは、バスクラリネットを座奏する場合の確認項目をあげたい。

一つ目は、楽器の角度である。これは、特に最低音がハ音まで出るバスクラリネット（以下、Low C 管）で特に見られることだが、楽器が長い分、斜め前方に出して構えてしまうことである。これは、背筋が曲がってしまうだけでなく、少し下方を見る傾向になるため、首が曲がってしまい、息の通り道に影響する。できる限り、まっすぐ楽器を構えることが重要である。そのためには、可能であれば、少し高めの椅子で練習することも重要である。椅子がない場合は、クッションなどで代用することも推奨する。



（悪い例：楽器が斜めになっている）



（良い例：楽器が真っ直ぐになっている）

次に気をつけたい項目は、左肩である。バスクラリネットは、地面に固定されている楽器であることから、楽器と身体を動かす演奏表現の自由が限られているため、音楽表現を、唯一自由に動かすことができる左肩周辺に求めてしまっていることがあるが、これは片方の肩だけを幾度も回す動作になることから、身体に与える悪影響が少ないとは言えないことと、左肩が上がると当然のことながら左手も一緒にあがってしまうために、先に述べたフィンガリングにも悪い影響が与えられる。楽器を構える時は、右腕も左腕も、なるべく日常生活と変わらない意識で構えることが、重要である。

練習方法としては、腕を脱力し、前後に振り子のように振り、腕が前方向に向いた時に、そのままずっと楽器の方へ構えるようにすると良い。こうすることで、身体に無理な負担をかけずに、長く楽器を演奏し続けることができることに繋がる。

以上の大きく二点が、楽器を構える姿勢で重要な項目となる。



(悪い例：左肩だけが上がっている)



(良い例：自然な形で構えている)

おわりに

日頃、バスクラリネットを用いた作品を研究演奏発表していく中で、バスクラリネットという楽器に対する注目度の高まりは、上昇傾向にあると感じられる。歴史がまだ浅い楽器である分、まだ独奏楽器としての可能性が広く知られていないことと同時に、一度バスクラリネットの可能性を知って魅力に虜になった現代作曲家たちが、次々とバスクラリネットを用いた新作を発表していることなどがあげられる。

作曲家たちと共同で作品を創り上げて行く会話の中で、バスクラリネットは、彼らからの大抵の無理難題要求に応じられる楽器であることも感じられる。現代作曲家たちにとって、これ以上、彼らのイマジネーションを正確に実現できる楽器も少ないのではないだろうかと感じられる楽器の一つであり、今後益々、あらゆるジャンルやシーンで、バスクラリネットの活躍の幅は、広がっていくであろう。

作品だけでなく、奏者や愛好家も増え続けている。中学・高校などの音楽教育活動の一環として吹奏楽部で始めたバスクラリネットを、社会人になってからも、それぞれの形で長く続けているバスクラリネット愛好家は増加傾向にあり、また、専門的に学びたいと思い、バスクラリネットを専科として音楽大学に入学を希望する学生も増えている。今後、国内の高等音楽教育機関の受け皿の拡大も、益々必要となって行くであろう。

同時に、正しい知識を持ったバスクラリネット指導者の育成が急務である。今後も、バスクラリネット指導に関する研究発表と後進の育成に力を注いで行きたい。



バスクラリネットについての講演をする筆者。北海道中から、60名を超えるバスクラリネット愛好家が集まった。
(2012.11.11 日本クラリネット協会主催 日本クラリネットフェスティバル in 北海道 / 北海道・北広島市)